

自らを問う 事例0：災害の経験

木俣美樹男

Questioned Myself - Case Study No. 0: Experience of Natural and Man-made Disasters

Mikio KIMATA, Plants and People Museum, INCH

1. はじめに

東日本大震災が2011年3月11日に発生した。私は東京郊外にある勤め先の2階にいたが、大きくかつ長く続く揺れに驚いた。居合わせた学生や職員は外に避難したが、私は研究室にとどまった。2階建ての建物であり、外に出るのが面倒なので、まあいいかと高を括って逃げなかっただけである。

実際、地震による目立った被害はなかった。しかしその後、事務室にあるテレビで繰り返される映像があまりに想像を絶する、凄ましい現実であったので、長らく鳥肌が立ち続けた。

2. 子どもの時の体験

私は小学5年生のころ伊勢湾台風を経験していた。恐ろしい一夜を、古い家屋の中で家族が寄り添って過ごした。台風の眼を見たが、幸い自宅が高台にあったので、瓦が数枚飛んだだけで家族は無事であった。通っていた御器所小学校の講堂は被災者の人々が暮らす場所になった。また、近所の中学校は救援のための自衛隊の基地になった。台風の去った後、友人と二人で、子どもの怖いもの見たさで自転車に乗って被災地を見に行った。実際に無数の水死体が並べられているのを見てしまい、その後、この記憶を消そうと思いつけてきた。

小学校の学芸会は被災した子どもたちに見てもらうことになった。私の役は「夢の超特急新幹線」で、かつ、これが唯一のせりふでもあった。せりふの順番が回ってきて、新幹線の絵を両手でぱっと広げたら、上下がさかさまであった。みんなの笑いを誘い、私は恥ずかしくて穴

にでも入りたかったが、今にして思えば、被災した子どもたちに少しでも笑ってもらえてよかった。

3. 阪神淡路大震災

1995年1月17日の阪神淡路大震災の時は、科学者としての好奇心ですぐに神戸に行った。生母の双子の姉が三宮に住んでいると聞いていた。しかし、事情あって終生会うこともないので、家族を心配しての行動ではなかった。知人も神戸の複数大学に何人かいたが、救助でもボランティアでもなく、誠に申し訳なくも、好奇心による行動であった。

大阪では何事もなかったように社会が動いていると見えたが、神戸から三宮に行き、街を歩き回ってみると、ビルや道路がひどく破壊されており、大変な惨状であった。

4. 東日本大震災の後

勤務先の在校生・卒業生の中には東北地方出身者が相当数おり、友人・知人も少なからず居住している。2011年3月の卒業式の際に、寄付金を募り、帰郷する院生に託した。彼女は食品などを携えて大船渡市に戻った。消防署員の父君に協力して、FM放送局を立ち上げて情報提供したと、その後、聞いた。ヘリコプターから撮影した映像で報告会をしてもらった。

私の自宅も勤務先大学も同じ市内にあったが、計画停電に組み入れられた。震災に伴う大津波によって福島で原子力発電所が崩壊したので、計画停電になるのはやむを得ない措置であった。しかし、私は世界中から収集した雑穀

類の種子を種子貯蔵庫2台に保存していた。大学までが計画停電に組み入れられたので、この対応に窮した。大急ぎで、データベースと保存種子を対応させ、整理して、主要な保存種子をイギリスの王立キュー植物園のミレニアム・シードバンクに移管することにした。

先方からはすぐに許可する旨の手紙をもらった。そこで、FEDEX 便によって送り出したが、ヒースロー空港で1週間ほど止められたようだ。理由は日本からの物資は放射性物質で汚染されている可能性があったからである。文部科学省が公開している放射線量データでは東京も低濃度ながら汚染されていた。勤務先大学も温室の雨どいの下では、独自に計測したところ、本来のバックグラウンドより2~3倍高い放射線量を示していた。東京都庁でも日々の放射線量を公表していた。タイの交流協定大学からの教職員・院生が東京を訪問することに躊躇していたので、私も特に放射線量の変化を気遣っていた。

私は東日本大震災後に、環境学習に関する調査研究プロジェクトで、2011年9月に、くりこま高原から南三陸町を訪れた。また、ホームガーデンに関する調査研究で2012年8月と2013年4月に岩手県三陸地方を訪問した。これら以外にも、私は雑穀や森林林業に関する調査で、東北地方を1974年秋以来、時々訪れてきた。これらの調査資料に基づいて、雑穀を中心とする家族による小規模農耕と食料安全保障についてまとめることにした(木俣2014a, 2014b)。

市民として寄付をし、何日かの復興作業をする任意な活動は尊いことと思う。しかし、さらに私にできること、なすべきことは民族植物学者として現場で事実を見て、聞き取り、記録し、これらの調査結果に基づいて考え、論理を組み立て、未来に向けて今の社会に問題解決の手法をささやかでも提案することだと考えた。

5. 三陸地方での現地調査報告への抗議

事例1以降の記録(付録資料)はこの折りに現地で聞いた証言である。本来、この記録は著者論文(木俣2014b)の付録として別雑誌に掲

載したものであった。この雑誌は、2014年3月に印刷を終え、私の定年退職による荷物整理がひと段落した後、4月末~5月初めに調査協力者にお礼状を添えて送付された。

その直後、一人のインフォーマントから雑誌の職務上の編集委員長宛に抗議の葉書が送られてきた。その内容は、1)校正印刷ミスにより、インフォーマント名が判明する、2)聞き取りに誤認がある、3)プライベートな内容に踏み込んでいるので、当人に関する記述をすべて削除するようにとの要望であった。

抗議の1)と2)に関して弁明はあるとしても、最終的には著者である私の責任に属することだから、ひとえに謝罪し、この要望と編集長の指示に従って、印刷済み雑誌は廃棄し、当人に関わる記述は論文からすべて削除のうえ、本文を加筆修正して、自費により改めて印刷し直した。定年退職後でもあり、「立った鳥、その跡を濁」したくなく、とりわけ、インフォーマントと他の方々に迷惑を及ぼしたくなかったからである。

しかしながら、3)に関わる内容に関して、著者には大きな疑問が2つ残ったのである。このために、本文を書き残すことにした。

第1は、なぜ、インフォーマントは直接会った著者である私に抗議しなかったのか。結局、編集長宛の抗議の葉書以外は、再三のおわび状の送付にもかかわらず、返信はなかった。当人が市販の冊子に実名(あえて自筆)で書いている内容に共感したので、聞き取り調査を依頼し、聞き取ったことに賛同し、忠実に証言として記録した。プライバシーに踏み込んだとして抗議を受け、削除を求められた内容は、実名ですでに印刷公表されている内容の現在における再確認で、おおよそ同じ内容であった。

したがって、プライベートな内容にはあたらず、市販の冊子に基づき、実名で引用してもよいはずである。インフォーマントの主張に共感して調査依頼し、合意の上で、聞き取りするという信頼関係が成立していなかったのかと考えて、残念でならない。見ず知らずの編集長にのみ抗議し、直接の聞き手である私には抗議の説

明がなかったことは、どのような事情であったのだろうか。インフォーマントにとって不利益があるのだと理解し、要望があったからには無条件で削除することに異存はない。しかし、自ら立派な志を公表しているのに、すべて削除せよということ、誇りを捨てるということとも受け取れる。ここに私は疑問と戸惑いをもったが、問い合わせに回答はなかった。

第2は、なぜ、編集長はインフォーマントに関わる部分以外に関しても、たびたび、本文の一部削除、事細かな修正を著者に要求したのか。論文は著者の責任において書くものである。証言者の名前が推測できるから、あるいは実名による著述であっても批判的な文脈であるところの修正を求めているので、批判的言辞に対する抗議を恐れて、このような文言を封じようとしたのか。編集長は正義の人で、良い人である。でも、親切的な圧力は暗に検閲されているかのよう、私には受け止められて不快であった。

私は調査や実験結果に基づき、考察したこと、自身の文章は研究者として責任を明確にするために、当然ながら署名付きで書いてきた。インフォーマントには不利益があってはいけないので、実名は書かず、無名のabcさんとしている。しかし、事実に基づく証言として、記録し、論文の調査結果および考察の根拠としていることに変わりはない。事実としての聞き取り調査結果がなければ、現場での根拠がない考察になる。聞き取り調査では、調査技能、調査時間などの制限から聞き間違いもありうるが、誤りのすべては著者の責任であり、インフォーマントには責任を負わせたくはない。

したがって、現場を観察し、現地で聞き取り調査をするような研究は、危険を伴い、効率は悪く、重い責任を負わなければならないので敬遠され、現場に通わないで、行政機関が行ったアンケート調査などのデータを用いて、統計解析するような研究が多くなる。

6. 「美味しんぼ」の事例との類似

折りしも、『ビッグコミック・スピリッツ』連載の漫画「美味しんぼ」の内容について、多

くの方々から賛否が寄せられていた。福島原子力発電所事故に関する描写や記述についてである(雁屋2014)。日頃、読まない漫画雑誌であるが、発売日に数店を探し回って購入し、読んでみた。主人公親子のセリフの一部を次に引用する。

「……だが、放射能に対する認識、郷土愛、経済的な問題など、千差万別の事情で福島を離れられない人も大勢いる。今の福島に住み続けてよいのか、我々は外部の人間だが、自分たちの意見を言わねばなるまい」「自分たちの意見を言わないことは、東電と国の無責任な対応で苦しんでいる福島の人たちに嘘をつくことになる」「偽善は言えない」「真実を語るしかない」(372ページ)。

「原発の事故がこのまま収まらず、拡大したら福島県は駄目になる。それは福島にとどまらず日本全体を破壊する。福島の未来は日本の未来だ。これからの日本を考えるのに、まず福島が前提になる」「なるほど。だから福島は日本の一部ではなく、日本が福島の一部と前に言ったのだな」「世界のどこにしよう俺の根っこは日本だ。原発事故は、日本という国がいかにか大事なものか思い知らせてくれた。福島を守ることは日本を守ることだ。であれば、俺の根っこは福島だ」「うむ。私の問いに対する答えとして、それでよかろう」「父さんは、福島の問題で、偽善は言えないといったね」「福島に住んでいる人たちの心を傷つけるから、住むことの危険性については、言葉を控えるのが良識とされている。だが、それは偽善だろう。医者は低線量の放射線の影響に対する知見はないと言うが、知見がない、とはわからないということだ。私は一人の人間として、福島の人たちに、危ないところから逃げる勇気を持ってほしいと言いたいのだ。特に子供たちの行く末を考えてほしい。福島の復興は、土地の復興ではなく、人間の復興だと思うからだ」「人間の復興……それが一番大事だわ」「では、われわれにで

きることは」「福島を出たいという人たちに対して、全力を挙げて協力することだ。住居、仕事、医療などすべての面で、個人では不可能なことを補償するように国に働きかけることだ」「そう働きかけることはわれわれの義務だ」(384-386 ページ)。

ここに引用した漫画の吹き出しで述べられている意見には共感し、賛同する。漫画の後ページには、16 個人・団体の賛否両論の意見が編集部の見解とともに公正に掲載されている。一読者としての私は、編集部が行政による強圧によって趣旨を曲げることなく、読者に自由な判断を委ねていることに対して敬意を表したい。

趣旨に賛同する人々は、被害者に寄り添う、現場を知る科学者、医者、環境 NPO である。一方で、肝心な文脈や趣旨にふれないように、描写や表現に問題を矮小化して、風評被害が拡大するからけしからんと批判しているのは行政機関や、現場に関わらない科学者などの利害関係者である。

風評被害は根拠のない不安によるものとされるが、今日まで被害の状況に関する事実がたびたび隠されてきたために、不安が増大しているのである。産地を偽る不心得な食品などの偽装もまれにあるので、嘘が混じれば不信が募り、風評ではなく、疑心になってしまうのである。また、事実を知りたくないから、放射線量を計測しないというのも、やはり虚偽に準ずると言える。

放射線量が高い地域の住民は少しでも早く避難し、長期的に移住すべきであり、移住を希望する人々への補償は原子力発電を推進してきた国や東京電力が当事者責任として十分に果たすべきである。放射線からの避難こそが第1になされねばならないことであり、現在、13 万人ほどの方々が避難している。現在進行している事実を隠すと被害が拡大し、大きな公害問題へと発展する。水俣病が拡大し、いまだに解決がつかない状況から学ぶべきである。原子力発電所の崩壊は国内にとどまらずに、地球規模の公害に拡大する可能性が高い。

勤務先であった国立大学では、たとえば、教授の給料は 9.7% 減額され、退職金なども減額された。この%は懲戒処分 10% 減額に近いものだと、教職員組合が批判していた。原子力政策が国の責任であるからには、その一端を担ってきた国立大学教職員として、東日本大震災の被災地の復興、とりわけ原子力発電所の人為災害対応のためにこのような措置がなされたことに不満はない。しかし、これらの資金が被災者の方々のためという本来の目的に使用されることを、固く願わずにはいられない。

7. 水俣病の事例との対比

好意や親切と見せかけた保身行為は、名誉欲の裏返しでもある猜疑心によるものであろう。風評被害を防ぐために、事実を見ないこと、知らせないことがよいのだという「自粛」は逆に風評を広げ、深める。何事も現実直視からしか、再出発することはできない。

水俣病が引き起こされ、多くの患者や研究者の方々の真摯な努力によって原因が究明されていく中でも、その成果事実を公表しない方が住民の不安を助長しないからよいとする、「正義」の研究者はたびたび現れた。しかし、上から目線の「厚意」は、むしろ事実を隠そうとし、結果として被害の拡大につながった。私たちは水俣病の経過から学ぶ必要があった(原田 1972)。

たとえば、水俣病が「発見」される前に、会社側は「漁民の体験事実を科学的でない、資料に乏しい」と相手にしなかった。原因不明な状態で、被害者を伝染病として隔離差別した。水俣市民は汚染の元凶が工場排水で、魚食が原因であると疑っていたが、水俣では口に出して言うことができなかった。さらにこれはデマだという漁業組合幹部さえいた。

熊本大学の研究者たちが、原因は海水汚染にあることを明らかにした段階でも、原因物質が特定できていないと言って企業は責任を取らず、行政は十分な対応を取らなかった。幾人かの漁民は魚食によって発症することが明らかになった段階でも、生活のために魚を捕り、隠れて食べていた。

ある大学教授は専門の研究会で、名指しで工場排水を原因と指摘するのは学者のすることではないと言った。相当数の大学教授も良心を捨て、研究結果を隠し、責任を取らなかった。医学の公正さ、中立などというものが存在するのか。漁協も労働組合も患者たちには冷淡であった。

こうした状況によって、水質汚染による公害は引き続き進行し、被害を拡大していった。水俣病裁判において、企業側は予測不可能で、不可抗力（無過失）であると言った。つまり、「想定外」なので、責任はないと主張しているのである。ここではすでに、安全性の考え方として、「降灰放射能の害が証明されるのは人類が減る時であり、人体実験の思想に他ならない」（武谷 1967）が引用されている。

学芸総合雑誌・季刊『環』は第 25 卷（2006）で、「水俣病とは何か」を特集している。この中に記録されている、水俣・本願の会座談会「魂うつれ—受難の底から湧き上がる思想」の話合いには、次のように、多くの深い示唆がある。

自然の叡智から学ぶ本願の会は、それぞれが一人に立ち返って集まる、自由な表現形態の会である。とにかく自分の考えを全うする人を探したい。支援者を見ているとどうも遊びのように感じられてならなかった。そこで支援者（団体）と縁を切って、一人で行うことにした。命というのは金に換えられない、かけがえがないものということをいかに表現するか。自然界といかに一体感を求めていこうとするのか。生きているあいだは努力しなければと思う。絶望感を深くするほどに、実は希望がほしい。

私は大学院生のころ、この座談会において「遊びのような」と言われた「支援者」であった。水俣病患者の支援に徹するという事で各大学に組織した学生行動委員会の数少ないメンバーであった。とって、寄付集めを少し手伝い、患者、宇井純らと一緒に環境庁や興業銀行などで座り込みをただけである。当事者でな

いものが支援というのはおこがましいと、患者に言われようが、徹夜の実験、生活費のためのアルバイトなどの合間を縫って、「反社会的活動」をして、世の中に温かくされるわけではない。この遊びは私の人生を大きく変えた。

8. 今後のために

抗議されたインフォーマントの証言は削除したが、私の異論とそれ以外の聞き取り証言を本誌付録として残すことにした。これまで、別雑誌の論文にはこのような付録はほとんど残さなかったのだが、東日本大震災はあまりにも甚大で、さらに福島原子力発電所の崩壊が伴っているため、あえて証言記録を残しておく必要だったのである。

「物言えば唇寒し秋の風」（石川啄木）であることは承知であるが、原子力発電所の崩壊は、すでに予測したように、水俣病の拡大悪化の経過と同じ経過をたどっている。企業が秘匿した被害状況が後出しされ、放射性物質による公害を東北から北太平洋へと拡大しないために、水俣病の歴史的経験から学び、東日本、とりわけ福島の実情を見極めて、現実的に対応せねばならない。

文献

- 藤原良雄編 2006、「特集水俣病とは何か」、『環』25：103-295。
 原田正純 1972、『水俣病』、岩波書店、pp.244。
 雁屋哲 2014、「美味しんぼ」第 604 話福島の実実 24、『週刊ビッグコミック・スピリッツ』、第 35 巻第 28 号：365-400、集英社、東京。
 木俣美樹男 2014a、「ホームガーデンによる生物文化多様性保全と家族食料安全保障—特集にあたって、調査研究の概要と趣旨」、『環境教育学研究』23：19-30。
 木俣美樹男 2014b、「岩手県の雑穀栽培と家族・地域の食料安全保障」、『環境教育学研究』23：103-130。
 武谷三男編 1967、安全性の考え方、岩波書店、東京、230pp。

付録資料 東北地方における聞き取り証言事例

事例 1

ヒツジ親8頭、仔4頭を飼っているが、羊肉は30ベクレルを示した。土壌1kgあたり300ベクレル、基準値以下でも、自分の良心に従って、今は自然食レストランに販売しないようにしている。安全基準が不安定で、500ベクレルから100ベクレルに変わった。原子力発電所から出た放射性物資による汚染のせいで、奥州市の草は餌にできなくなり、草を食べる家畜は放牧できなくなった。外国産の飼料を買うが、これでは放牧の意味がなくなり、経営も困難になった。

夢を描いて原野を開拓し20年、環境面で閉塞感がある。家庭での節電はいわばすり替えて、経済優先に変わりはない。有機農家なら低所得でも、食料と燃料は確保できる。若い人が村から出ていくと、村の公共仕事ができなくなる。村が救われる方向で、社会や技術が変わることを望む。原子力発電を止めるのなら、納得がいく。エネルギー多用のライフスタイルの見直しを提案した。去年は参加者300名のイベントをした。低所得の中で、心の豊かさを失わない技術が大切である。生産を誇らない方が良い。生産者の視点で、生物の住処を作ることが面白い。

原子力発電には反対していたので、線量計をもって、以前から測定していた。いろいろ気になっており、現在も計測していて、また、市役所にも測定を求めている。ガスを使用していないので、薪まきを燃料にしている。薪の灰に放射能があるので、処理に困っている。子ども130人を検査したが、かなり高い数値が示された。宮城県や福島県の子どもたちより、高いほどであった。淡水魚のウグイは放射線量が多いから、採取を自制している。生産者だから気になるが、特にシイタケは線量が高い。栽培者は高齢化し、やめる人も出ている。裏の林地で、旧東北農業試験場の研究者が林間放牧の調査を市民と共同で行っている。専門用語が分かりにくいので、分かりやすく話してほしい。

事例 2

岩手県山田町織笠、白石地区を訪ねた。当人は70歳。水田は42aあるが、減反をして、20a作付している。ハウス1aでキュウリを栽培して、直売所に出荷している。家畜は飼育していない。

震災直後に、個人ではなく白石地区として声掛けをし、多くの住民が5kg以上の自家用の籾付稲などを提供した。秋になればまた採れると、協力者が多かった。震災後には、イネの作付が増加した。被災者は米を求めて次々きたが、この地区ではすぐに提供していたので、後から来た人にはあげられなかった。おにぎりにして、1日に2~3回運んだ。おにぎりに海苔をつけると、粥にできないので、よくない。味噌汁も作って、運んだ。

避難所への食料配布は少しでよく、災害対応で働いている人々にこそ食料配布が必要である。自衛隊が体制を作り、もう炊き出しはいらぬといわれるまで、白石地区では3~4日間炊き出しを行った。自衛隊は近隣の山田航空自衛隊が3日後には来たが、自衛隊としての救助体制が整うのに10日間がかかった。電気は1週間で回復した。

販売農家はイネを籾の状態に保存しているので、そのまま食べることはできず、精米せねばならない。電気は止まり、燃料の供給も途絶え、動力もない。昔の精米機があり、軽油もタンクに2本あったので、これで精米した。おにぎりを運ぶにも、ガソリンまきが不足し、軽トラックも動かせない。寒いまきが、薪もなかったので、木を伐って薪にした。各家庭から毛布を募って、軽トラック2台分を被災者に配った。余りに寒いので、新聞紙や体育館の暗幕などにくるまった。

震災の1年前には、コミュニティー活動の一環として、炊き出しの訓練をしていた。中山間地向けの制度に基づき、町役場からの依頼により白石地区で事業を頼まれた。地震当時は、食料の備蓄も少なく、座っていても米は来ないの

で、津波被害が及ばなかった町の奥に食料を探しに行った。消防団では山火事対応もせねばならなかった。白石地区に伝えて、センターの鍵を開けて炊き出しを30人以上で、3日間にわたって行った。薪ストーブでご飯を炊いて、おにぎりにした。避難所で炊き出しをして、織笠地区のコミュニティーセンターに運搬した。

国道は寸断されていたので、通ることができず、秋田県の消防隊、自衛隊もこの地区の細い地方道を通じた。まだ雪が残っていたので、すれ違えず、大混雑であった。一般車は106号線を通ることができなかつた。震災時には電気が止まり、情報伝達手段がなくなったので、すべての状況判断を地区でせねばならなくなった。非常時に即応できる首長でないとだめだと思った。肩書のある人々は責任があるので、むしろ保身に走って、決断力を失い、公的な責務を果たさなかつたと思う。マニュアル通りにはいかないのだ。避難所の人々にしか、町役場は対応しなかつた。親戚に避難した人も多い。

雑穀は2戸が栽培している。農業をやっていると緊急時に対応できない。豆や小麦も作付しておく。自給であれ、たとえ趣味であっても、作物栽培は続けておくべきだ。農地があればこそできることだ。水田も皆で管理しないと、畦畔などに雑草が生える。中山間地の環境保全の意義を評価し、第6次産業化が必要である。小学校の児童に農業のことを教えている。

事例3

当人は山田町豊間根に居住、65歳。母と本人が小柄なので、母からは「かたはづなで、引けない人間になれよ」と励まされた。かたはづなとは馬の手綱のことで、自分の意思をもてという意味と解される。農業委員会の責任者である。この農家は300年来、百姓一途で、彼も跡を継いだ。子どもは5人、最後まで生き残るためには農耕は必要である。住む場所と食べ物があれば生きていける。人に頼るな、農耕も自分の責任ではないか。農家は資本額からすると、多い。

16年前までは酪農をしていたので、生命あ

る動物を大切にしたい。昨日までいた牛が気になって、牛肉は食べられない。今ではやっと食べられるようになった。欧米化した肉食をしないで、和食に戻った方がよい。申し訳ないと思う気持ちが大切である。生死の現場を見ると、最後は土にかえる。感謝の気持ちがあればよい。親父さんを自宅で、家族で看取った。生命のつながりが大切であり、本当の福祉である。出来るだけの事をしたから、葬式では泣かなかつた。「男は人前で泣くな。義理で来ている人ばかりだから」と親父に教えられた。

2011年3月11日の地震には津波の予感がした。しかし、堤防への過信があつたので、逃げ遅れたのであろう。山田町は地盤がしっかりしていたので、地震による直接被害は少なく、津波による被害が著しかった。農家は米も野菜もあるから大丈夫であつた。山田町の内陸部は稲作中心である。冷涼な気候で栽培が困難であるのに、なぜイネをつくるのか。よそから持ってくれば良いのではないのか。現実には、災害時に人手で食料を運ぶには限界がある。豊間根の3地区は津波が来る前に炊き出しに備えていた。粃付のイネしかなかつたので、燃料や動力機がない中で、どのように粃すりや精白をするのか。

体育館には700名ほどが避難していたが、水につかっていたので寒さで死ぬ人もいた。3日ほどして、地区の皆が被災者に対して何かをしないとイケないと思い始めた。地域コミュニティーが大切で、各部落8か所のセンターにはガスや炊飯器があつた。都市ガスは止まってしまふ。毎年地区を変えて防災訓練の中で炊き出しをしていたことが、現実の災害時に役立った。山田町豊間根には非常用給水ポンプがあつた。これが機能したので、3週間にわたって自衛隊もこの水を運んで、水には困らなかつた。水があつたので、おにぎりは次第に良いものになったが、海苔付き、梅干し、しかし、その後は塩だけに戻った。津波後、電気は10日間、電話は2~3週間つながらなかつた。原子力発電所の崩壊についても、1週間は情報が伝わらず、まったく知らなかつた。

山田町町民として、困っている人を助けるた

めに、2日目には鉄工所から発電機を借りて、精米機を動かし、稲粃総計3トンを役場と震災被災者に個人的に無償提供した。町会議員は地元から食料の提供を得ることができず、震災直後には何も役立たなかった。津波で流された消防署の機能は豊間根に移動してきた。4日目は、電気がなく、冷蔵庫が機能しなかったので、従兄弟にもらったウニなどの生ものを全部食べ、贅沢した。

被災して泊めてほしい人が来たので、「米と灯油を持参するように」と言ったら、「百姓ならあるだろう」と叱られた。しかし、人を甘やかしてはいけない。長らく避難所にいる人は、動かない。体が弱いと頭も弱くなる。ちなみに、生活保護を受けている老婦人が5kg提供してくれたので、感涙しながら、塩気の出たおにぎりを食べた。避難所への炊き出しは1か月続けた。大沢地区の人は一人当たり、半分のおにぎりしか食べられなかった。

炊き出しのルールはない。50年前は、火災時に消防団に対して、炊き出しするように暗黙の了解があった。この時に救われた人々が、行政から助成を受けることなく、自主的に炊き出しを始めた。今でも、部落で慶弔時には皆で持ち寄って食事を出す。20年前まで、米はこうした時にしか食べなかった。昔は農家の協力、結が機能していた。隣の畑のじゃがいもを食事用に黙ってもらっても、共助関係にあるので、とがめられることはなかった。今は農作業が機械化されて、協力関係が薄まっている。3月末に炊き出しの停止を町会議員に提案したら、なぜ今頃かと叱られた。行政の責任で、自衛隊が来た時に、停止すべきであった。

この地区は350世帯、大人は750名、農家は20戸のみである。多くの農家は農業協同組合に生産物を出しているが、g家は直接販売をしているので、稲粃として保存している。美味しい米であるので、希望者には価格を下げず、10kgあたり4200円で個別に販売している。10ha分を山田町で消費し、余剰は町外に販売している。農家のトマトは熟してからとるので、美味しい。低農薬で栽培している。ダイコンなどは土に穴

を掘って、貯蔵する。遠野で見たが、冬はキャベツをひっくり返して保存する。

サバイバルの方法を親父さんから教わった。フジヅルを半分に裂き、編むと担架にできる。ロープワークは祖父母からなんとなく教わってきた。百姓は何でもできる。機械の修理も自分でしないと、技術料が高い。百姓は金がないので、自分で何でもする。だるまストーブは暖かい。薪が燃料で非常時にも使用できるし、煮炊きもできるので、有用である。石油ストーブは局所的に暖まるだけだ。親父さんが言うには、「土をいじっているとお互い話し始める」、砂場と同じで、交流ができる。当人は自然に基づく生活と一次産業から学ぶことは大きいという。

中学校のバレーボール部の監督を引き受けている。5人も子どもがいるので、子育て経験をかわれてのことらしい。農業委員になって15年、田沢湖に研修（修学旅行）に行った際の事例、皆ができないと食事が出ないから、いじめっ子も弱い子を手伝った。農家のお母さんも勉強せよとうるさいので、子どもたちはこの旅行では勉強せよと言われなから、ゆっくり寝られた。教育と農政の失敗が今になって出てきた。経済活動を重視しすぎた。戦争で苦勞したので、こどもに苦勞させたくないとのことで、金だけを与える拝金主義になった。学校支援者として、5年生の総合学習で教えているので、これらの子どもが大きくなってどう成長するか、楽しみにしている。

東京の人々は被災者のことをどのような思っているのだろうか。東京の国立大学生に聞いたが、福島原子力発電所がどこの会社に属しているかさえ知らなかった。都市に住む人々も炊き出しが組織できるようなコミュニティーを作っておく必要がある。5人の娘さんは儲からないにもかかわらず、生きるために農業をしたいと考えている。津波から3年たっているが思い出したくない。中央線の電車に行方不明の姉似の人が乗っていたので、父娘共にびっくりした。被災した人は津波の時の話ができない。たとえば、ガソリンスタンドの若者が、助けを求めて叫んでいた人々を実際には助けることがで

きず、1年を経てもそのことを語れなかったという。

事例4

山田町役場職員は地震当日、中学校下の海岸に近い自宅を津波によって流されたので、家族とともに中学校に避難した。彼は役場職員として、避難所となった中学校の被災者の指揮をとらざるをえなかった。中学校生徒約500名、被災町民約500名、合計約1000名が中学校に避難していた。地震で火災が発生して、山林に延焼して、中学校にも火が及びそうになったので、より安全な高校へと避難者を誘導することになった。想像を絶する事態が起こっていたのだ。高校は近かったので、多くの人々は歩いて移動した。スクールバスの運転手もたまたま避難していたので、負傷者は体育用のマットに寝かせて、トラックで移動させた。

町役場の本部が機能しなかった。ワンセグによって全国の事情はわかったが、被害で施設が壊れ、停電で地元情報が得られなかった。津波で流された薬局に、歯医者や乳児のミルクや医薬品を探しに行った。原子力発電所の水素爆発による放射性物質の汚染対応のために、救助活動を停止し、屋内待機することになった。

チリ地震の津波が山田町を襲ったのは、当人が2歳の時であった。親父さんから、豊間根の役割だからと、すぐ4月に、中学生も手伝って、種まきをしたと聞いた。三陸津波の時は、先祖からの言い伝えとして、浜と丘はつながっていないと、助け合わなければならない、と言われた。地区の皆さんも、食料を提供した。生活保護を受けている一人暮らしの老女も、買ったばかりの米10kgの半分を提供した。4日目には町役場職員に、もう提供はいらないと言われたが、危機管理の体制が町役場にはなかった。農林水産業も地域にあるべきで、白河の関を止めれば、東京の人々は生きられない。

東京人は原子力発電所が東京のために造られたとは知らない。震災時には、都会では人々が並んで自動車を給油していた。このために、被

災地には燃料が不足して、物資が運ばれてこなかった。被災地では、燃料は自衛隊を通じてしか、入手できなかった。炊き出ししても、自動車の燃料がなく、運べなかった。しかし、山間部は落ち着いていた。姉は今でも行方不明であるので、津波のことは思い出したくない。

当人は埼玉県の大学を卒業後、長男であったので帰郷して、山田町役場に就職した。当初は同行しないで、紹介のみの心づもりであったと思われるが、インフォーマントのたつての要望により、道案内を買って出て下さったようだ。午前はe家宅、午後はf家宅に同行していただき、お陰で、震災当日のリアルな話が聞けた。eとfは、震災時における行政担当者や町会議員の対応の不十分さを、地位ある人は保身で責任を回避したと批判的に語ったが、gは反論せずに公務員としての中立を守った。

同僚の町役場職員は公務員として、公共と家族の板挟みになりながら、公務を優先した。家族を救えなかった広報担当者は人生の意味を失ったと、精神的にとつてもつらい現状だという。集落の現実を見ないと、集落が衰退し行政は実行できない。助成・補助制度を利用するのはよいが、自分たちのことはまず自分たちです。国から降りてくるものを待ってはいけない。山田町から提案するべきである。無理なく故郷を守る。齢をとると故郷が恋しくなる。

事例5 各地の道の駅（補足）

1. 道の駅宮守および遠野とびあ

道の駅宮守では、雑穀のヒエ350円/200g、アワ350円/200g、イナギミ380円/200gが販売されていた。昼食はひつつみを食べた。アマランサスは売られていなかった。旧東和町では前回調査でみられたヒエとハトムギの畑を今回は見出すことができなかった。水田はササニシキとひとめぼれを中心に作付されていた。

遠野市役所は震災による破損のため、臨時で、「とびあ」（大型店）の4階に引っ越していた。生産者の持ち込みで遠野産のイナギミ2袋が、350円/200gで売られていた。とびあの書籍コー

ナーには郷土出版の1棚があり、少数の民俗書や郷土史書が置かれていた。震災関連の書籍は特設コーナーに置かれていた。主に写真集で、食料確保や第一次産業についての書籍は見られなかった。

2. キャンパスおおの（洋野町大野）

県と町の予算で整備されており、大学（東北工科大学）の一研究室との連携がとても素晴らしく、キャンパス+道の駅を構成している。行政と地元民ほかの本気でやらなければ、経営はよい方向に展開しない。

都市化を進めたところには多くの店舗がある。田野畑村や野田村などは雑貨店や食品店が少ないので、道の駅は有効な地域交易の場になっている。道の駅がなければ、食事をとる場もなく、単に通過するだけの場になる。基本的には自給農耕、少しの余剰を加工・調理もして、道の駅に出荷し、観光客、地元の非栽培者に、現在は震災復旧工事関係者の食事素材にも使用していた。

事例6 社会教育施設など

1. 軽米町ミレットパーク

メニューはソバ、ダツタンソバ、アマランサスソバ、ヒエソバ、へっちょこ団子、カレーなどであった。ソバとへっちょこ団子を食べ、サルナシジュースを飲んだ。客足は閑散としていた。アプローチ・ルートが悪かったせいもあり、3度目の訪問であるにもかかわらず、道案内には不安があった。

ミレットパークは幹線道路から3kmほど入ったところにあった。昼過ぎではあったが、展示室は閉じたままで、来訪者は関心がないようだ。管理者にお願いして、開けてもらった。展示内容は更新されておらず、畑の雑穀栽培、野外展示もなくなっていた。

しかし、軽米町の雑穀畑は素晴らしかった。アマランサスの、10a～1haの畑が数か所認められた。赤花に少し黄花が混入していた。これほどの広さの畑は世界的にも珍しい。キビ畑3

か所、アワ畑2か所、モロコシ畑1か所、それぞれ5～20a、生育も良く、キビ、アワは登熟中、モロコシは開花中であった。意外なことにヒエの畑を観察できなかった。栽培している地区が他所だったのかもしれない。

二戸市では雑穀王国のペナントが多く掲げられており、雑穀加工品が多く、駅ビルで多彩な商品が販売されていた。たとえば、麺類（ダツタンソバ、ソバ、ヒエ、アマランサス）、菓子（和風と洋風）、酒（あずまえびす）、ふりかけ、粒食素材、などである。

2. 御所野縄文公園

御所野縄文公園の近隣にはヒエとアワの畑があった。それぞれ約20a栽培されていた。ヒエは一部が出穂していたが、アワは登熟期で、倒伏している個体も多かった。これで、キビ、アワ、ヒエ、モロコシ、ソバ、アマランサスの畑を確認することができた。ダツタンソバは判別できなかった。見誤ることはないので、見損なったのであろう。

御所野縄文公園は見ごたえがあった。北方の縄文文化の高度さは、たいしたものだ。北方ルートの農耕文化伝播とその独自性を強く示唆していると考えられる。

しかし、一つ気に入らないのは、展示では縄文農耕の証拠が示されておらず、担当学芸員はこのことを否定的に考えているのかと思った。ガイドの婦人に雑穀展示がない理由を聞いたところ、学芸委員を呼んでくれた。

彼の説明では、遺跡土壌のフローティングはしていないが、花粉分析は東京大学の研究者に依頼しているとのことであった。近所で雑穀を熱心に栽培している高齢者がいるのに、関心はないのだろうか。ヒエは東北／北海道起源の可能性もあつたところ、老人が小使い稼ぎ（せいぜい30万円くらいにしかならない）に栽培しているにすぎないとのお返であった。話がつながらず、縄文農耕には興味関心がないというこのようだ。